

東西南北県人往来④

全国で活躍する県人の皆さんが集う各県人会の成り立ちや様子、あるいはふるさと徳島の懐かしの思い出などを、県人会ごとに自由に語っていただくコーナーです。

長崎で発揮した阿波根性

谷 千代子
長崎徳島県人会



1936(昭和11)年長崎市旭町生まれ。両親は旧日和佐町(海部郡美波町)出身。東京ドレスメーカー女学院卒業後、昭和34年、旧日和佐町出身の谷宏氏と結婚。夫君とともに以西底曳漁業の最盛期を経験し、2人の子息に恵まれる。趣味は短歌と三味線。

阿波徳島の若い漁師達が眼前の太平洋漁場が将来性に乏しいと判断し、九州五島沖の東支那海まで出漁し漁場開拓に生命をかけ並々ならぬ苦難を乗り越え勝利の大漁旗を掲げた。故郷を離れ青春のすべてをかけた漁師達は阿波根性を発揮し、優秀な船頭が次々と船主として誕生し活気溢れる長崎の漁業の町「旭町、稲佐町」と言われるまでになった。岸壁には大漁旗を掲げた漁船がところ狭しと並び、出港入港には家族の送迎があり繁栄した。原子爆弾投下被爆の長崎で終戦を迎えた漁師達が2代目と共に復活したが昭和末期から中

国との二百海里等の事情も重なり衰退にあい止むなく会社の閉鎖を見るに至った。栄枯盛衰は避けられないが九州出漁団の伝統と栄光に生きた人々も、時代の変換で転廃業の悲運に陥った人もあり現在に至っているが、新魚市場は京泊という町名の所に移転。時代に合わせた市場となり活躍中である。故郷をあとにして以来、多忙で帰省する機会に恵まれず、それでも大浜海岸から見る立島の赤い鳥居薬王寺を想い出しては励みになった。徳島県人会の会長増田様の援助で阿波踊りの衣裳を揃え見よう見まねで練習を開始した。我々は競争の為幼い頃踊った記憶はないが何故かッよしこの音にはすぐ馴染み楽しくなった。幸い小さい頃三味線を習っていた方がいて、太鼓鉦笛とあつという間にお囃子が

出来上り、踊れるようになった。今では老人ホーム介護施設を慰問出来るまでに必要請があればどこにでも出かけている。年長者は90歳、平均年齢70歳余ながら、月に2回練習日を定めコミニティセンターを借りて幼名を呼び合い遠慮なく方言で語り合えることを喜びとし、故郷を偲びながら練習を続けている。季節が巡ってくれば心弾みじつとしていられず3回程本場に行き活気づけ、孫達の時代まで続けられと願いつつ、頑張ります。



ふるさと日和佐(現美波町)大浜海岸を訪れた谷千代子さんと長崎徳島県人会事務局長・谷宏さん夫妻

Memo 長崎徳島県人会

平成2年、徳島県出身で長崎在住の漁業、金物関係者30名が参集し、第1回徳島県人会が発足。代表世話人は浜崎水産(株)社長・浜崎直之、増田石油(株)社長・増田高彦の両氏。事務局長にこの集いを呼びかけた谷宏氏を選任。同4年の第3回徳島県人会には82名の県人が参加する盛会ぶり。5年に浜崎直之代表世話人が逝去されたため、第4回総会は増田高彦会長のもと6年に開催。8年に第5回総会開催以降は毎年総会を開催している。

平成12年、阿波踊り同好会“すだち連”を結成。同年、島原ガマダス阿波踊り大会に参加し島原市長賞受賞。その後、博多どんたくを始め県内各地の行事に参加して踊りを披露する一方、老人ホームや大病院からの要請を受け、ボランティアで慰問活動に励む。13年、第2代会長に(株)テツカ社長・手塚喜太郎氏が就任。翌14年と16、21年の3回、徳島に阿波踊り見学旅行を実施。今後もふるさと阿波を偲びながら全員仲良く県人会、阿波踊りを進めていきたい。



長崎徳島県人会 会長
手塚 喜太郎氏